少年野球の人口減少と打開策について

生涯スポーツゼミナール　1314016　加藤宏太

1、研究の動機・研究の目的

私が今回卒業論文のテーマを少年野球人口の減少と打開策にした動機は私自身が少年野球をやっている頃は私の所属していたクラブの部員は６０人いたのだが現在は４０人となっていて１０年ほどで２０人も減ってしまっている。さらに厳しい状況におかれてしまっているクラブもあり、中にはクラブ同士の合併や廃部になっているクラブもある。実際に2010年から2014年の間で2000チーム近くがなくなってしまった。このままクラブ加入者が減っていくと野球をする人が減ってしまい、日本の野球は弱体してしまう。それを阻止するためにどうして少年野球をやりたいと思わないのか、どうすれば野球をやりたいと思ってもらえるのか、少年野球にはどのような問題があるのかを少年野球の部員やコーチまた大学野球の選手を対象に調査し、今後の少年野球の発展に役立てたいと考えている。

2、研究方法

佐倉市内の少年野球チームの子供とコーチに協力をしてもらい、アンケート調査またインタビュー調査を行う。また、順天堂大学の野球部員約にも個々の少年野球チームがどのような環境だったか、また現在チームはどのような環境におかれているのかをインタビュー調査する。これらを集計することで今と昔のチーム事情の差、チームにおける問題点、などを見つけていく。

3、主な結果と考察

この度論文を書き終えて出た結果と考察はまず監督へのインタビュー調査では3チームの監督へインタビューをおこなった。部員の人数に関しは変わらないか減っていると回答してくれた。しかし、中には学年ごとによって人数にばらつきがあり大変だという意見が見られた。この問題に伴い人数不足ではないが不安はあると言った意見が聞こえて来た。部員の獲得のためにポスターを作成し掲示する、体験会を開催していることもわかった。次に子供達へアンケート調査はチームに対する満足度と家庭での野球に関する関心について調査した。結果はチームへの満足度は高い子供がほとんどであった。しかし、チームによって全員が最高の評価をしている中で評価が低い子供が多少いるチームもありチームへの満足度はチームごとに異なることがわかった。家庭での野球への関心は高い家庭と低い家庭にばらつきがあり、家庭では全く野球の話しをしない、野球を見ることはないという家庭もあるようだ。

最後に順天堂大学の学生にインタビュー調査した結果は千葉県以外の都道府県出身者にインタビューしたが都道府県ごとにチームの現在の状況が大きく異なることが見えた。中に

は学校が廃校してしまいそれに伴ってクラブも無くなったという話しもあった。

4、結論

①少子化の問題

これは誰もが想像できる問題である。小学校に生徒が少なくなってしまっては比例して少年野球をする子供も少なくなってしまう。しかし、スポーツ嫌いや野球を知らない子供達を取り込むことで改善できるのではないかと考えた。そのために体験会や見学会などを開催することが必要だと思う。

②チームの指導方針

入る前と入ってからチームの指導方針にギャップが生まれるとチームへの満足度が落ちてしまい野球を辞めたいと感じてしまい、友人に進めることもできなくなってしまう。各チーム子供の保護者も含めてチームの指導方針を明確にして説明できるようにすることが大切だと感じた。

③指導者不足

野球は大変多くの危険が伴うスポーツである。そのため子供を監視、指導することができる大人が多い方がいいが現在チームによっては指導者が少なく指導者１人に対する負担が大きくなっている。これは OB の学生や地域の若者に呼びかけることも大切になってくると考えている。

④メディア露出の減少

私が子供の頃はプロ野球のシーズン中は毎日野球中継されていたが現在はほとんど日本シリーズや大きな大会が放送されるようになってきた。よって子供達の野球への関心が薄くなってしまうことが想像できる。チームでプロ野球観戦をしたり、高校野球観戦の時間を作ることも必要になるのではないかと考えている。

⑤保護者の負担が大きい

保護者への負担はチームによっても変わってくる。毎週当番制で小さな子供を抱えてグラウンドに出ているお母さんも少なく無い。しかし、チームによってはお母さん達は試合で車出しに人が足らないから来てもらう程度のチームもある。これは監督コーチを中心に話し合ってできる限り保護者に負担がかからないように話し合うことが大切になるのではないかと考える。

5、卒業論文の執筆を終えて

本研究において佐倉市内の少年野球チームの皆様、私自身が所属していた少年野球チームの皆様に協力していただいたおかげで研究を進めることができました。感謝申し上げます。また、指導教員である黒須充先生には格別のご指導を賜りました。心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。